双葉通信【第 137 回】“ふくしまの切捨ては許さない”　20211201

上　田　　勉

「サンマいない」三陸暗たん　歴史的不漁、加工業者買い付け断念も

「三陸沿岸の漁港の主力魚種のサンマが歴史的な不漁に見舞われている。全国の 11 月末時点の水揚げ量は 2 万トンに届かず、過去最低だった前季を大きく下回る見込みだ。東北の水産関係者には暗たんとした空気が広がっている。

全国さんま棒受網漁業協同組合（東京）がまとめた水揚げ量の推移はグラフの通り。今季は 11 月末時点で 1 万 7,899 トン。2008、09 年は 30 万トンを超えたが、その後は減少傾向をたどり、19、20 年と過去最低の記録更新が続いた。

漁港別では、大船渡が本州トップの座を守るも前年同期比 6 割減の 2,382 トン。気仙沼は 4 割減の 2,074 トン、宮城・女川は 7 割減の 1,199 トン、釜石が 7 割減の 255 トンにとどまるなど軒並み不振となっている。

漁場が三陸沖の公海周辺と遠く、燃油代の高騰も響いて東北での水揚げが減ったとみられる。漁場に比較的近い北海道・花咲は唯一前季を上回り、1 万 388 トンを確保した。

不漁の影響は魚市場や水産加工業者を直撃する。

女川漁港には例年 100 隻以上のサンマ船が入港するが、今季はわずか 34 隻。漁期は既に終わり、水揚げ量は記録的不漁だった 19 年の 3 割に満たなかった。

女川魚市場の加藤実社長（72）は「数年前までは毎年 1 万トン以上取れていたのに。こんなに悪い年は記憶にない。年々群れが三陸沖へ降りてこなくなっているので水揚げは減る一方だ」とため息交じりに話す。サンマの炭火焼きやフライなどを製造する大船渡市の森下水産は今季、加工用サンマの買い付けを断念した。購入量が 1,000 トンを超えた時もあったが、ゼロは 1982 年の創業以降、なかったという。

森下幹生社長（72）は「サンマ自体の水揚げがなく価格が高い。加工に合ったサイズも少ない。こんなことは初めて」と嘆く。地元の同業者から買い取った分や前年からのストックで来年の加工用サンマを確保したが、量は例年の 3 分の 1 程度だ。

森下社長は「お得意さんに大船渡のサンマの商品を届けたいが、原料がない。『来年こそは』と期待するばかりではなく、魚種転換など『脱サンマ』を本気で考えないといけない時期かもしれない」と悩む。」（「河北新報」12 月 25 日付け）

【サンマ不漁の原因】

(1) 温暖化の影響で日本周辺の海水温が上昇したことが挙げられます。

(2) 中国や台湾などの外国漁船がサンマ漁に参入し始めたことが挙げられます。

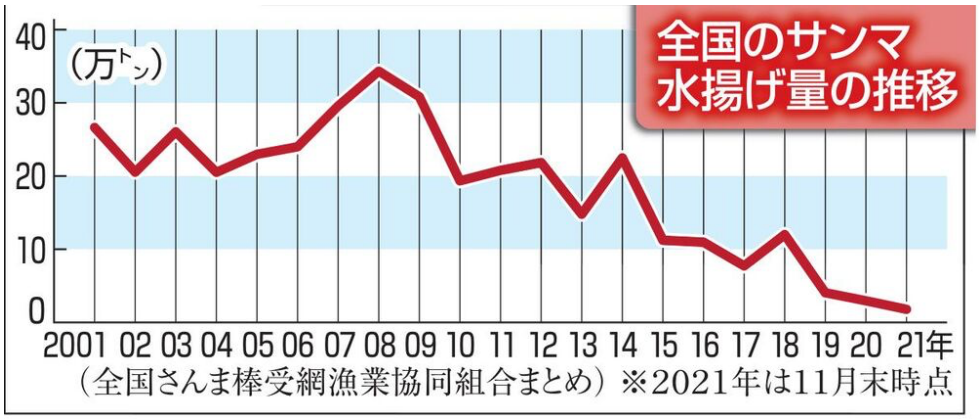
（トトくるホームページ）

◆サンマはもはや、大衆魚から高級魚へ

◆庶民の口に入れるのは、大衆魚のアジ・イワシなのだ

【図でみる】これまでのサンマ回遊ルート

【大船渡漁港に水揚げされたサンマ。本州最多の量を誇るが、前年を大きく下回っている＝11 月、大船渡市】



【全国のサンマ水揚げ量の推移】